

蘇生と再生

「すげかえられた首」再考

金 沢 篤

「さて」とグレゴールは考えて、あたりの暗闇を見回した。自分
がもう全く動けなくなっているのがほどなくわかった。それが格
別不思議だとも思わなかった。むしろこの細々とした足でここま
で這ってこられたというのが不自然なくらいであった。その他の
点ではわりに気分がいいように思われた。むろんからだ全体が痛
いには痛い、それもやがて薄らいで、最後には全く消え去るよ
うに思われた。柔らかいほこりにすっかりおおい隠された背中の
腐った林檎やその周囲の炎症部の存在もすでにほとんどそれとは
感ぜられなかった。感動と愛情とをもって家の人たちのことを思
い返す。自分が消えてなくならねばならぬということに対する彼
自身の意見は、妹の似たような意見よりもひょっとするともっと
もっと強いものだったのだ。こういう空虚な、そして安らかな瞑
想状態のうちにある彼の耳に、教会の塔から朝の三時を打つ時計
の音が聞えてきた。窓の外が一帯に薄明るくなり始めたのもまだ
ぼんやりとわかっていたが、ふと首がひとりでにぐんと下へさ
がった。そして鼻孔からは最後の息がかすかに漏れ流れた。

カフカ『変身』より⁽¹⁾

はじめに

本稿は、インドの古典の中で、「蘇生」と「再生」がどのように描かれているか
を具体的な用例に則して検討し、併せて、哲学的にも一つの重要なモチーフであ
ると考えられる「すげかえられた首」問題に対して新たな一つの視点を提供す
ることを目的としている。この「すげかえられた首」問題とは、筆者自身が十年ほ
ど前に、テキスト解釈の立場より問題点を指摘し、少しく論究したものである⁽²⁾。
が、後で詳しく触れるように、実のところ哲学的にはすっきりとは決着をつけら
れなかったという筆者には苦い思いの作である。その反省に立っての今回の再考
である。

『広辞苑第五版』(CD-ROM版)には、以下のようにある。

そ せい【蘇生・甦生】

いきかえること。よみがえること。「人工呼吸で させる」「雨で草木が
する」

さい せい【再生】

死にかかったものが生きかえること。蘇生。復活。

再びこの世に生れること。再誕。

精神的に生れかわること。信仰に入って新しい生活をはじめること。新生。

.....

筆者が本稿の表題にした「蘇生」とは、上記辞典の通り、「死んだ者が生きかえること」であるが、「再生」の方は、必ずしもしっかりこない。強いて言うならば、『広辞苑』の なのだが、それならばむしろ「再誕」とした方が誤解は少ないかも知れない。「蘇生と再生」とは「蘇生と再誕」のこと、英語で言うならば、revival と rebirth か？ 後者は、インド文化を考える上でも重要な「輪廻転生」の「転生」のイメージである。何れにしてもこの「死んだ者が生きかえる」という事態を突き詰めていくと、その両者の違いはどんどん薄れていくように思われる。そしてさらに筆者は「変容/変身」についても思いを巡らしてみた。「老い」による変容、インドの場合はさらに「呪」による変容/変身も見逃せない。「老い」にしても「呪」にしても、あるいは日常的に変容を可能とする「化粧/よそおい」にしても、突き詰めていけば、類似の「力」の単なる別表現に過ぎないように思われてくるのではないか。そう、「すげかえられた首」問題は、こうした蘇生、再生、変容/変身のメカニズムの考察なしには解決し得ないことに遅まきながら筆者は気づいたのである。「精神/魂と身体」という二元論的理解は当然ながらこの場合も最も重要な前提となるものである。「まぼろし」について色々想像をたくましくしたインド人ではあるが、「無」の跳梁する理論にはそうやすやすとは与し得なかった。

ともあれ、以下には順を追って、蘇生、再生、そして「すげかえられた首」問題へと論を進めていきたい。

・死と蘇生(1)

(i) tataḥ satyavataḥ kāyāt pāśa-baddhaṃ vaśaṃ gatam /
aṅguṣṭha-mātraṃ puruṣaṃ niścakaraṣa yamo balāt //16//
tataḥ samuddhṛta-prāṇaṃ gata-śvāsaṃ hata-prabham /
nirvicesṭaṃ śarīraṃ tad babhūva[^]apriya-darśanam //17//

yamas tu taṃ tathā baddhvā prayāto dakṣiṇā-mukhaḥ /
 sāvitrī ca^api duḥkha-ārtā yamam eva^anvagacchata /
 niyama-vrata-saṃsiddhā mahā-bhāgā pati-vratā //18// (Mbh 』 -281-16 ~ 18)

(1) それから、ヤマ神は、力任せにサトヤヴァットの身体 (kāya) から、縄 (pāśa) に縛られた、[ヤマ神の] 支配下に入った、親指大の (aṅguṣṭha-mātra) プルシャを引き出しました。 <16>

それから、生气 (prāṇa) を引き抜かれ、呼吸 (śvāsa) が停止し、輝きが損なわれ、動きのなくなった、その身体 (śarīra) は、見るに耐えられないありさま (darśana) になりました。 <17>

一方、ヤマ神は、その [プルシャ] を、そのように繫縛した後に、南方 (dakṣiṇā) を目指して、出発しました。そして、自製の誓願を成就し、大いなる幸に恵まれた、夫一途の、苦痛に悩めるサーヴィトリーもまた、他ならぬヤマ神に、従って行きました。 <18>

この部分はもはやあまりにも有名な「サーヴィトリー物語」⁽³⁾の有名な件りである。寿命の尽きたサーヴィトリーの夫、サトヤヴァットの身体から、ヤマ神が、縄で、プルシャを引きずり出して、連れ去ろうとする。そこに立ち会う妻サーヴィトリーの視点を重ね合わせるようにして描かれているのである。このシーンは古来インドの哲学者たちにとっても重要と考えられたようで、例えば有名なヴァーチャスパティミシュラは、『サーンキヤ頌』に対する有名な註釈書『真理の月光』の中で、以下のように注目したのである。

(ii) liṅganāt jñāpanāt buddhy-ādayo liṅgam, tat anāśrayan na tiṣṭhati / janma-marāṇa-antarāle buddhy-ādayaḥ pratyutpanna-śarīra-āśrayāḥ, pratyutpanna-pañcatanmātravattve sati buddhy-āditvāt --- dr̥śyamāna-śarīra-vṛtti-buddhy-ādivat / vinā viśeṣaiḥ iti, sūkṣmaiḥ śarīrair ity arthaḥ /
 āgamāś ca^atra bhavati ---
 tataḥ satyavataḥ kāyāt pāśa-baddhaṃ vaśaṃ gataṃ /
 aṅguṣṭha-mātraṃ puruṣaṃ niścakarṣa balād yamaḥ // (Mahābhārata Vana-parva-adhyāya 296)

ity aṅguṣṭha-mātratvena sūkṣma-śarīratvam upalakṣayati / ātmano niścakarṣa-asambhavāt sūkṣmam eva śarīram puruṣaḥ tad api puri sthūla-śarīre śete iti //41//
 (VSk 41:p.125)

(2)「リング/徴表たらしめるが故に」(linganāt) [すなわち] 知らしめるが故に、覚(buddhi)などが、リングである。その[リング]は、所依なくしては、存在しない。生死の間にあつて、覚などは、現在の身体を所依(āśraya)とする。現在の五唯を有するものである時に、覚などであるが故に、見られつつある身体に存する覚などのように。「諸特殊性なしに」(vinā viśeṣaiḥ) というのは、微細な諸身体[なしに]という意味である。

また、これに関しては[以下の]阿含(āgama)がある。

《それから、ヤマ神は、力任せにサトヤヴァットの身体(kāya)から、縄(pāśa)に縛られた、[ヤマ神の]支配下に入った、親指大の(aṅguṣṭhamātra)プルシャを引き出しました。》

したがって、親指大であることによって、微細な身体であることを指示している。アートマン(ātman)に対して、引き出すこと(niṣkarṣa)は不可能であるが故に、プルシャ(puruṣa)とは、他ならぬ微細な(sūkṣma)身体(śarīra)であるが、その[微細身]もまた、粗大な身体(sthūla-śarīra)の中、都城に休らう、ということである。

ここで「微細な身体」というのは、いわば輪廻転生の主体と目されるところのものである。生ける者の、粗大な身体に、休らうのは、この微細な身体であり、粗大な身体が滅した後も、再生を重ねて行く主体である。それが、「サーヴィトリ一物語」の中では、死を司る神、ダルマの王たるヤマ神によって、サトヤヴァットの[粗大な]身体より引きずり出されて、黄泉の国へと引かれて行くと描かれているのである。いかがであろうか？ 夫[サトヤヴァット]に一途な(pativrata)妻サーヴィトリーは、その現場にあつて、どのように振る舞うのだろうか？ 周知の通り、サーヴィトリーは縄で縛して夫サトヤヴァットを連行して行くヤマ神に付き従って行く。背後には、プルシャを抜かれ、生気を失った、夫サトヤヴァットの「亡骸」をおいて。サーヴィトリーは連行され行く夫サトヤヴァットを奪還すべく必死にヤマ神に食い下がる。そんなサーヴィトリーに対してヤマ神は語るのである。

(iii) yama uvāca /

dadāni te sarvaṃ anindite varaṃ yathā tvayaa[^]uktaṃ bhavitā ca tat tathā /

tava[^]adhvanā glānim iva[^]upalakṣaye nivarta gacchasva na te śramo bhavet //27//

sāvitrī uvāca /

kutaḥ śramaḥ bharṭṛ-samīpato hi me yato hi bhartā mama sā gatir dhruvā /
 yataḥpatiḥ neṣyasi tatra me gatiḥsura-īśa bhūyo ca vacas nibodha me //28//
 satām sakṛt saṃgatam īpsitam paraṃ tataḥ paraṃ mitram iti pracakṣate /
 na ca^aphalaṃ sat-puruṣeṇa saṃgatam tataḥ satām saṃnivaset samāgame //29//
 yama uvāca /
 mano-anukūlaṃ budha-buddhi-varḍhanaṃ tvayā^aham ukto vacanaṃ hita-
 āśrayam /
 vinā punaḥ satyavato^asya jīvitam varam dvitīyaṃ varayasva bhāmini //30//
 (Mbh -281-27 ~ 30)

(3) ヤマは、語りました。

「[わたしは]あなたに、贈物 (vara) をなんなりと、与えるであろう、欠点なきお方よ。あなたによって言われたなら、それは、そのようになるであります。あなたには、旅路による疲労 (śrama) の如きものが、[わたしには]見受けられる。[あなたは] 戻りなさい。[そして] 行きなさい。[そうすれば] あなたには、疲労があるだろうことはないでしょう。」 <27>

サーヴィトリーは、語りました。

「実に、夫の近くにおいて (bharṭṛ-samīpatas) どうして、わたしに、疲労があり
りましょうか？ なぜなら、夫のあるところ、わたしのその行路は堅固な
のですから。[あなたが] 夫 (pati) を、連行していこうとしているところの、
そこに、わたしの行路があるのです。神々の長よ、そして、[あなたは] わた
しの、さらなることばを、覚知なさるべし。 <28>

『善者たちとの一会は、最高の願いである。友情は、それよりもさらに優れたものである』と [人々は] 申します。そして、善き人との交際が無果であることはありません。それ故に、[人は] 善者たちとの会合のうちに、住すべきなのです。」 <29>

ヤマは、語りました。

「あなたはわたしに語りました。[その] 言葉 (vacana) は、心に心地よく、賢者の知性を増進するものであり、幸福を抛り所とするものです。またも、この (asya) サトヤヴァットの、生命 (jīvita) を除き、美しき婦人よ、[あ
なたは] 第二の贈物 (vara) を選びなさい。」 <30>

(iv) vara-atisargaḥ śata-putratā mama tvayā^eva datto hriyateca me patiḥ/

varam vṛṇe jīvatu satyavān ayaṃ tava^eva satyaṃ vacanaṃ bhaviṣyati //53//
 tathā^ity uktvā tu tān pāsān muktvā vaivasvato yamaḥ/
 dharmarājaḥ prahr̥ṣṭa-ātmā sāvitṛīm idam abravīt //54//
eṣa bhadre mayā mukto bhartā te kula-nandini /
 arogas tava neyaś ca siddha-arthaś ca bhaviṣyati //55//

(4) わたしに対して、100人の息子を持つことという贈物の許可が、他ならぬあなたによって、与えられました。にもかかわらず、[あなたによって]わたしの、夫 (pati) が、連れ去られるのです (hriyate)。贈物 (vara) を [わたしは] 選びます。この (ayaṃ) サトヤヴァットは、[蘇]生すべし (jīvatu)。[そうすれば、]他ならぬあなたには、真実の言葉があるでしょう。」<53>
 一方、「承知した」と言って、ヴァイヴァスヴァタ、ダルマの王ヤマは、それらの縄 (pāsā) を解き放ち (muktvā)、喜悅した心で、サーヴィトリーに対して、以下の言葉を、語りました。<54>

「麗いお方よ、この (eṣa) あなたの、夫 (bhartṛ) は、わたしによって、解放されました (mukta)、一族を喜ばせるお方よ。あなたの、息災なる [かれ] は、連れて行かれ (neya)、そして、目的を成就するものとなるでしょう。<55>

(v) sāvitry api yame yāte bhartāraṃ pratilabhya ca /
jagāma tatra yatra^asyā bhartuḥ śāvaṃ kalevaram //60//
 sā bhūmau prekṣya bhartāraṃ upasṛtya^upagūhya ca /
 utsaṅge śira āropya bhūmāv upaviveśa ha //61//
 sañjnāṃ ca satyavāṃl labdhvā sāvitṛīm abhyabhāṣata /
 proṣya^āgata iva premṇā punaḥpunar udīkṣya vai //62//
 suciraṃ bata supto^asmi kim-arthaṃ na^avabodhitaḥ/
 satyavān uvāca /
 kva ca^asau puruṣaḥ śyāmo yo^asau māṃ saṃcakarṣa ha //63//
 suciraṃ bata supto^asi mama^anke puruṣarṣabha /
 sāvitry uvāca /
 gataḥ sa bhagavān devaḥ prajā-samyamano yamaḥ//64//
 viśrānto^asi mahā-bhāga vinidraś ca nṛpa-ātmaja /
 yadi śakyaṃ samuttiṣṭha vigādhāṃ paśya śarvarīm //65//

upalabhya tataḥ saṃjñāṃ sukha-supta iva[^]utthitah/
 mārkaṇḍeya uvāca /
 diśaḥ sarvā vana-antāṃś ca nirīkṣya[^]uvāca satyavān //66//
 phala-āhāro[^]asmi niṣkrāntas tvayā saha sumadhyame /
 tataḥ pāṭayataḥ kāṣṭhaṃ śirasas me rujā[^]abhavat //67//
 śiro-abhitāpa-samtaptaḥ sthātum ciraṃ aśaknuvan /
 tava[^]utsange prasupto[^]aham iti sarvaṃ smare śubhe //68//
 tvayā[^]upagūḍhasya ca me nidrayā[^]apahr̥taṃ manaḥ /
 tato[^]apaśyaṃ tamo ghoram puruṣam ca mahā-ojasam //69//
 tad yadi tvam vijñāsi kiṃ tad brūhi sumadhyame /
 svapno me yadi vā dr̥ṣṭo yadi vā satyam eva tat //70// (Mbh -281-60 ~
 70:i,pp.775-776)

(5) サーヴィトリーも、ヤマ神が去り、また夫を取り戻して、彼女の夫の青ざめた身体 (kalevara) の [存する、] そこへ行きました。 <60>

かの女は大地 (bhūmi) の上に夫を見るや、近づき、そしてかき抱き、膝に頭を載せ、大地に座りました、実に。 <61>

そして、サトヤヴァットは意識 (saṃjñā) を取り戻し、サーヴィトリーに対して言いました、旅に出て帰った者のように愛情をもって、何度も何度も見つめた後に、実に。 <62>

サトヤヴァットは、語りました。

「ああ、[わたしは] 何と長く眠ったものか。何故、[わたしは、] 起こされなかったのか？そして、実に、わたしを引き出した他ならぬかの黒い人物 (puruṣa) は、どこにいるのだろうか？」 <63>

サーヴィトリーは、語りました。

「おお、[あなたは] 実に長くわたしの膝の上で眠られました。人牡牛よ。かの尊き神、被造物の制御者たるヤマ神は去りました。 <64>

大いなる幸いのお方よ、[あなたは] 休息をとられました。そして、お目覚めになられました。王子よ。もし、可能なら、[あなたは] 立ち上がって下さい。[そして] 夜の更けたのをご覧下さい。」 <65>

マールカーンデーヤは語りました。

それから、意識を取り戻し、快適に眠った者のように立ち上がり、あらゆる

方角と森の隅々を見た後に、サトヤヴァットは語りました。<66>

「果実を持ち来るべく、[わたしは]あなたと共に、出かけたのでした、よき胴を持てるお方よ。それから、木を切りつつあるわたしの、頭に、苦痛が生じました。<67>

頭の苦痛に苦しんで、立っていることがもはや出来なくなり、わたしはあなたの膝の上で眠り込んでしまった、その一切を [わたしは] 憶えています。美しき婦人よ。<68>そして、あなたによってかき抱かれていたわたしの心は (manas) 睡眠によって奪われてしまいました。それから、[わたしは] 恐ろしき闇と大いなる力を持てる人物 (puruṣa) とを、見ました。<69>

もし、あなたがそのことを知っているのなら、それが何であるかを、[あなたは] 語ってください。よき胴を持てるお方よ。わたしの見たのが夢なのか？ それともあれは真実に他ならないのか？」<70>

この生ける人間であるサーヴィトリーと死を司る神であるヤマの両者にとっては、サーヴィトリーの夫たるサトヤヴァットは、縄によって縛せられているブルシャ、親指大の微細身であることに注目すべきであろう。また蘇生したサトヤヴァットの意識の中でも、ヤマ神が「わたしを引き出した他ならぬかの黒い人物」と名指されている点に注目すべきである。そして、改めて、「死」とは輪廻の主体たる魂の、粗大な身体との別離、離脱である点に心すべきである。サーヴィトリーにとって、夫サトヤヴァットはもはや「亡骸」となって地面に横たわる粗大な身体の中にはいないのである。

サーヴィトリーは、夫サトヤヴァットを連れ去ろうとするヤマ神にどこまでも追いつがるのである。ヤマ神によって戻れ、戻れと再三言われても決して戻ろうとしない。・・・これはサーヴィトリーの愛する夫サトヤヴァットは決してその「夫の身体」ではないことを意味している。サトヤヴァットを襲った、予期された「死」の内実が明瞭に見てとれたと考える。サーヴィトリーの愛する夫サトヤヴァットはヤマによって夫の身体から引きずり出されて連行されていった、いわば「微細な身体」であることを忘れるべきではないのである。残念ながら、ヤマの縄縛から解放されて奪還した夫(の微細身)を、サーヴィトリーが夫の「亡骸」のある場所にどのようにして連れ帰ったかは描かれてはいない。そして夫の身体＝「亡骸」に、どのようにして夫サトヤヴァット(の魂)が帰還したかも明確には描かれてはいない。だが、筆者がここで言わんとしている「死と蘇生」のメカニズ

ムだけは明瞭に見て取れたことと思う。夫サトヤヴァットを妻サーヴィトリイーが、死神ヤマが、そして夫サトヤヴァット自身がどのようなものとして見ていたかも、もはや明瞭である。いわゆるサトヤヴァットの「死」という事件の後もサトヤヴァットは厳として存続したのである。蘇生したサトヤヴァットは、意識を失い、記憶をおぼろにしながらも、「わたしを引き出した黒い男」との記憶を保持しているのである。サトヤヴァットは「死」して後、再び「生」を得たのであるが、それはサトヤヴァットの「再生」ではなく（当然ながら「転生」ではなく）、サトヤヴァットの「蘇生」と言うべきものであろう。サーヴィトリイーの馴染み親しんだサトヤヴァットの身体（粗大な身体）＝「亡骸」は、サトヤヴァットの「束の間の死」の間（束の間の離脱／別離の間）損なわれることなく無事保存されていたのである。「蘇生」の為には「亡骸」の保存が必須である点も確認すべきである。

次節では、やはり「死と蘇生」のもう一つの事例を見てみたい。同じく『マハーバーラタ』のエピソードである。

・死と蘇生（2）

(vi) sā daṣṭā sahasā bhūmau patitā gata-cetanā /
 vyasur apreksaṇīyā^api prekṣaṇīyatama-ākṛtiḥ //17//
 prasuptā^iva^abhavac ca^api bhuvi sarpa-viṣa-arditā /
 bhūyo manoharatarā babhūva tanu-madhyamā //18//
dadarśa tām pitā ca^eva te ca^eva^anye tapasvinaḥ /
viceṣṭamānām patitām bhū-tale padmavarcasam //19//

 devadūta uvāca /
 abhidhatse ha yad vācā ruro duḥkhena tan mṛṣā /
na tu martyasya dharma-ātmann āyur asti gata-āyusaḥ //6//
gata-āyur eṣā kṛpaṇā gandharva-apsarasoḥ sūtā /

 sūta uvāca /
 tato gandharva-rājaś ca devadūtaś ca sattamau /
 dharmarājam upetya^idaṃ vacanaṃ pratyabhāṣatām //12//
 dharmarāja^āyuso^ardhena ruror bhāryā pramadvarā /

samuttiṣṭhatu kalyāṇī mṛtā[^]eva yadi manyase //13//

dharmarāja uvāca /

pramadvarā ruror bhāryā deva-dūta yadi[^]icchasi /

uttiṣṭhatv āyuso[^]ardhena ruror eva samanvitā //14//

sūta uvāca /

evam ukte tataḥ kanyā sā[^]udatiṣṭhat pramadvarā /

ruros tasya[^]āyuso[^]ardhena suptā[^]iva vara-varṇinī //15//

(Mbh I-8-17 ~ 19; I-9-6 ~ 7a; 12 ~ 15.p.31)

(6) かの【ブラマドヴァラー】は、咬まれるや、直ちに意識 (cetana) を失って大地に倒れました。生命を失って (vyasu) 見るに堪えられない筈であるにも拘わらず、最も見られるべき姿をしており、さらにまた、蛇の毒によって犯されて、眠っているかのようでした。細き胴の【かの】女は、いっそう魅力的でありました。 <17-18>

そして、父親、及びそれら他の苦行者たちは、地面に動くことなく倒れている、蓮華の光輝を持てる、かの女を見ました。 <19>

.....

神の使者は、語りました。

「ルルよ、実に【あなたが、】苦痛と共に、言葉で、述べたことは、無駄でした。ですが、生命の尽きた (gata-āyus) 死すべき者には、ダルマから成る者よ、【なお】生命 (āyus) があるということはないのです。 <6>

ガンダルヴァとアプサラスのその憐れなる娘は、生命が尽きたのです。

<7a>

.....

吟遊詩人は語った。

それから、最高の二人、ガンダルヴァ王と神の使者は、ダルマの王に近寄って、以下の言葉を返しました。 <12>

「ダルマの王よ、もしかなうことなら、ルルの生命 (āyus) の半分によって、【その、】死んだばかりの (mṛtā[^]eva) 美しき妻ブラマドヴァラーが、【蘇生して、】立ち上がりますように (samuttiṣṭhatu) 。」 <13>

ダルマの王は語りました。

「神の使者よ、もしそなたが望むなら、ルルの妻ブラマドヴァラーは、他なら

ぬルルの生命の半分を得て、[蘇生し、]立ち上がるべし (utthiṣṭhatu) 。

<14>

吟遊詩人は語った。

[ダルマの王によって]このように語られた時、その結果、かの美しい顔の娘
ブラマドヴァラーは、かの[夫]ルルの生命の半分[を得ること]によって、
眠っていたかのように、立ち上がりました (udatiṣṭhat) 。 <15>

いかがであろうか、この場合、先に見た「サーヴィトリ物語」の場合とは異なって、死者ブラマドヴァラーの描写はひたすら外面的なものに留まっている。寿命が尽きて死せるサトヤヴァットがヤマ神によって連行されたように、ブラマドヴァラーもヤマ神ないしその配下の者によって黄泉の国へと連行され（つつあつた筈である。だが、この用例では、死せるブラマドヴァラーは眠っているかのような「亡骸」としか描かれない。その一方で、生命体の生存／存続の為の不可欠の要件である「生命／寿命／アーユス」(āyus)が強調されているのである。とにかくアーユスが尽きれば (gata-āyus) 生存してられないのである。このアーユスとはいったい何なのか？ どうも、この用例で見える限り、仮に尽きてなくなっても、他者から譲り受けることが可能なものようである。それよりする限り、アーユスとは、「乗物」を動かす為の「燃料」のようなものと考えることが出来るのである。とすれば、粗大な身体を乗物に、精神／魂／プルシャ（アーツマン）を運転手／操縦士に、生命／寿命を燃料と比喩的に捉えることが出来るように思われる。われわれの日常的な経験で言うならば、乗物は、その三者のどの一つが欠けても動かない。自動車があり、運転手がいて、燃料があれば、自動車はともかくも動くのである。

また、人間の生死を司る神として「ダルマの王」ヤマ神が登場していることも忘れるべきではない。ここで言う「ダルマ」とは行為／カルマンと結びついたもので、善業、悪業の基準となるものである。前節でも触れたように、その「蘇生」のメカニズムの仔細は明らかにはならないとしても、一度<粗大な身体>を離れた<精神／魂>が、再び<元の身体>に戻ることによって、「蘇生」が実現するのである。

以上、同じ『マハーバーラタ』中の「死と蘇生」を廻る二つのエピソードを通して、われわれがインド的文脈の中で人の「死」を考える際に、看過し得ない視点が明確になったと言うべきであろう。次節では、「再生／再誕／転生」のエピソ

ードを眺めてみたい。

・死と再生：生天／昇天

さて、これまでは「蘇生」について検討したが、今日に伝わるインドの種々古典文献の中には、「蘇生」とは言い難い「再生／転生」についての言及が少なからず見受けられる。しかも、通常「死」は「再生」を含意していると言い得る。だが、「蘇生」の方は比較的短時間のうちに展開するドラマと言い得るが、「死と再生」のドラマはおそらくや気の遠くなるような長い時間にわたることが普通であるから、死についての言及は頻出しても、それに「再生」のエピソードまでもが附加されることは稀である、仮にあったとしても「その後、なにになとして再生しました」と簡単に済まされることがほとんどであろう。その「再生」のメカニズムを斟酌し得るほどのディテールの描写も簡単には見いだせない。

以下の用例は、『ラーマヤナ』に於ける「再生」のドラマの貴重な描写である。ラーマ王子を苦境に導くことになる父ダシャラタ王が図らずも若き日に犯した「悪業のエピソード」である⁽⁴⁾。詳細は省くが、老いた両親を扶養する奇様な苦行者を血気盛んな若きダシャラタ王が誤って射殺してしまう。いまわの際のその苦行者よりの願いを聞き入れて、その老いた両親に自らの犯した不祥事と子息の立ち至った「死」という忌まわしい事態を報告した結果、以下のように話が展開する。

(vii) sa ca^uddhṛtena bāṇena sahasā svargam āsthitaḥ /

bhagavantāḥ ubhau śocann andhāv iti vilapya ca //18//

ajñānād bhavataḥ putraḥ sahasā^abhihato mayā /

śeṣam evaṃ gate yat syāt tat prasīdatu me munīḥ //19//

.....

naya nau nṛpa taṃ deśam iti mām ca^abhyabhāṣata /

adya taṃ drāṣṭum icchāvaḥ putraṃ paścima-darśanam //26//

rudhīreṇa^avasikta-aṅgaṃ prakīrṇa-ajina-vāśasam /

śayānaṃ bhuvi niḥsaṃjñam dharmarāja-vaśam gatam //27//

(R -64-18 ~ 19;26 ~ 27:i,pp.253-254)

(7) 「

そして、か [の苦行者] は、 [わたし、ダシャラタによって、] 矢が引き抜か

れた結果、天界（svarga）へと旅立たれました（āsthita）。「[わたしの老父母] 尊き兩名は、盲目なのです」と、嘆き、泣いた後に。<18>

無知（ajñāna）故に、あなた様のご子息は、わたしによって突如殺害されたのです。以上がそのすべてなのです。かくなる上は、聖者（muni）は、わたしにお情けをおかけ下さい。」<19>

.....

そして、[聖者は]「王よ、われわれ兩名をかの地へ連れ行くべし」と語りました。「今や、われわれ兩名は、最後の姿をした、[われわれの]その息子を見んと欲する。」<26>

血まみれの肢体（aṅga）をして、ずたずたになった革の衣服を帯び、大地に横たわり、意識無く、ダルマの王（=ヤマ神）の支配下に入った[息子を]」<27>

(viii) tathā[^]uktvā kartum udakaṃ pravṛttaḥ saha bhāryayā //46//

sa tu divyena rūpeṇa muni-putraḥ sva-karmabhiḥ /

svargam adhyāruhat kṣipraṃ śakreṇa saha dharmavit //47//

ābabhāse ca tau vṛddhau śakreṇa saha tāpasah /

āśvasya ca muhūrtaṃ tu pitarāṃ vākyam abravīt //48//

sthānam asmi mahat prāpto bhavatoḥ paricāraṇāt /

bhavantāv api ca kṣipraṃ mama mūlam upaiśyathaḥ //49//

evam uktvā tu divyena vimānena vapuṣmatā /

āruroha divaṃ kṣipraṃ muni-putro jita-indriyaḥ //50//

.....

evam tvaṃ putra-śokena rājan kālaṃ kariṣyasi //54//

ajñānāt tu hato yasmāt kṣatriyeṇa tvayā munih /

tasmāt tvāṃ na[^]aviśaty āśu brahma-hatyā nara-adhipa //55//

tvāṃ apy etādṛśo bhāvaḥ kṣipram eva gamiṣyati /

jīvita-anta-karo ghorō dātāram iva dakṣiṇām //56//

evam śāpaṃ mayi nyasya vilapya karuṇaṃ bahu /

citām āropya deham tan mithunaṃ svargam abhyayāt //57//

(R -64-46 ~ 50;54b ~ 57:i,p.255)

(8) このように語った後、[聖者は、]妻と共に[息子の亡骸を]水で清め始

めました。<46>

一方、ダルマを知れるその[死せる、]聖者の息子は、自らの[生前の]諸行為(karman)によって、神的な(divya)容貌(rūpa)をとり、インドラ神(śakra)と連れだって天界(svarga)に速やかに昇っていきました。<47>

そして、[その]苦行者は、インドラ神と共に、その老いた兩名に語りかけました。そして、しばし、慰めた後、父に向かって[以下の]言葉を語りました。<48>

「わたしは、あなた方兩名に対する奉仕(paricāraṇa)の故に、大いなる境涯(sthāna)に到りました。そして、あなた方兩名もまた、わたしの地平(mūla)に到達なさることでしょう。」<49>

一方、このように語った後、感官を制御せる聖者の息子は、美しい形をした神の(divya)乗物(vimāna)によって、天(diva)へと速やかに昇っていきました。<50>

．．．「．．．

このようであるから、王よ、あなたは、[あなたご自身の]息子に対する憂いによって、臨終時を為すでしょう。<54>

しかるに、[わが息子たる、かの]聖者が、クシャトリヤたるあなたによって、無知故に、殺害されたのでありますから、人民の長よ、バラモン殺し(brahma-hatyā)が、即、あなたを見舞うことはありません。<55>

致命的(jīvita-antakara)にして恐ろしい(ghora)[われら兩名のもの如き]そうした事態が、正しく速やかに、あなたにも訪れることでしょう。[功德が]施物の施与者に[訪れる]ように。』⁽⁵⁾<56>

このように、わたしに対して呪詛(śāpa)を投げかけ、大いに哀しげに泣いた後に、火葬の為の薪に身体(deha)を上らせて、その[老]夫婦(mithuna)は、天界(svarga)へと趣きました(abhyayāt)。<57>

いかがであろうか？ これまで見てきたと同様の表現が見られるのである。死んだ後も、ダシャラタ王に射殺された苦行者は、<主語>であることを与えられて「新しい[神の]身体」を付与され、「神の身体」を持って、人間として生ける両親に語り、そして動じることなく昇天して行くのである。いわば、人間として死んだ者の神への再生のドラマと言うべきである⁽⁶⁾。前節までに見たのとの違いは、ダシャラタ王の不注意によって矢を射られ、そして矢を抜かれた「亡骸」は

修復されることもなく、置き去りにされたままである点。一度その「亡骸」を離脱した、奇妙な苦行者＝聖者＝息子は、死して後、天界を目指すのである。「ヤマ神等による連行」のプロセスは描かれないものの、当然ながらそのステップを踏んだものと考えらるべきであろう。新たな生存の場たる天界に相応しい新たな「神的身体」を速やかに得た上で、彼はもはや老いた盲目の両親を遺して去って行くことに動揺することもないのである。これこそ、「再生」と呼ぶべきものであり、文字通りの昇天にして「生天」と呼ぶに相応しいドラマであろう。生天せんとする息子の、後に取り残された地上的両親に対する言葉は、「主体」としての断絶も無く持続性を見事に体現したものとなっている。亡き息子を慕って、老父母は人間としての生を捨て、今や息子の住まう「天界へと趣いた」と簡単に記されるのである。地上に遺された息子の「亡骸」、そして天界へと新たに旅立った老いた両親の「亡骸」は、もはや「蘇生」には無用の長物と化した筈である（事実、火による自死、火葬されたことが仄めかされているのである）。

以上で、「すげかえられた首」問題にとりかかる準備作業はほぼ完了したと考える。次節では「すげかえられた首」問題を再考しよう。

・すげかえられた首

冒頭でも触れた通り、筆者は以前「すげかえられた首」について論じた。ソーマデーヴァに帰される『カターサリットサーガラ』の一部をなす『屍鬼二十五話』中の第六話をテキスト解釈の立場に立って仔細に分析したのだが、今にして思うと、それは必ずしも十分なものではなかったと思われる。周知の通り、筆者の言う「すげかえられた首」問題とは、マダナスンダリーという一人の女性にとって大切な、夫と兄という二人の男性が、共に自らの首を斬って死んだことに端を発するものである。その死の現場に行き会ったマダナスンダリーが絶望して、後を追うように自死しようとするが、ガウリー女神に制止され、両名の「切り離された首と胴体を繋いだなら」両名の「蘇生」が適うであろう、と告げられる。マダナスンダリーが喜び勇んで指示された作業を為した結果、二つの死体が蘇生する、という「すげかえられた首」のエピソードを廻る問題である。マダナスンダリーは慌てたせいで、夫の首を兄の胴体に、兄の首を夫の胴体に繋いでしまう。ガウリー女神の「力」によって死者が見事に蘇生するのだが、先に見た「サーヴィトリ物語」や「ルルの妻ブラマドヴァラー」の場合のように、すっきりとした

蘇生とはならなかったわけである。その「すげかえられた首」のエピソードは、『屍鬼二十五話』のご多分に漏れず、トリヴィクラマセーナ王に対する屍鬼ヴェーターラによる物語として描写される、次いで、その蘇生した二人のうちのどちらがマダナスンダリーの夫であるか?という問いかけがトリヴィクラマセーナ王に対して発せられる。この屍鬼の問いかけに関わるものが、筆者が言うところの「すげかえられた首」問題である。この点を確認した上で、改めて問題のテキスト箇所を見てみたい。

(ix) tato^akṣata-aṅgau jīvantāv ubhāv uttasthatuś ca tau /
 śiro-vinimayāj jāta-saṃkarau kāyayor mithaḥ //48//
 atha^anyonya-udita-sva-sva-yathāvr̥ttānta-toṣiṇaḥ /
 praṇama devīm śarvāṇīm yathā-iṣṭaṃ te yayus trayāḥ //49//
 yāntī ca dṛṣṭvā svakṛtaṃ śiro-vinimayaṃ tayoh /
 vignā kiṃ kāryatām ūḍhā sâ^abhūn madanasundarī //50//
 tad brūhi rājan ko bhartā tasyāḥ saṃkīrṇayos tayoh /
 pūrva-uktaḥ syāt sa śāpas te jānāno na bravīsi cet //51//
 ity ākarṇya kathā-praśnaṃ rājā vetālatas tataḥ /
 sa trivikramaseno^atra tam evaṃ pratyabhāṣata //52//
 yat-saṃsthaṃ tat-pati-śiraḥ saiṣa tasyāḥ patis tayoh /
 pradhānaṃ ca śiro^aṅgeṣu pratyabhijñā ca tad-gatā //53// (Kss XII-13-48 ~
 53:pp.420-421)

(9) それから、首のすげかえ(śiro-vinimaya)によって、両身体(kāya)相互の混合(saṃkara)が生じたものの、その両者は、肢体に損傷なく(akṣata-aṅga) [蘇]生し(jīvat) 立ち上がりました(uttasthatuś)。 <48>

そして、それら三名は、相互に語られた各自の出来事に満足し、シャルヴァーニー [= ガウリー] 女神に敬礼した後に、目的[の地]へと、進み行きました。 <49>

そして、進みつつ、その[蘇生した夫と兄の]両者に対して、自らが為した、首のすげ替え(śiro-vinimaya)を知って、その妻女、マダナスンダリーは、「どうするべきだろうか?」[と]動揺しました(vigna)。 <50>

『そこで、王よ、[汝は]語るべし。混じり合った(saṃkīrṇa) その両者のうち、いずれが、かの[マダナスンダリー]の、夫(bhartr̥)であるか? もし、

[汝が、]知りつつも、語らないならば、前に言われた、あの呪詛（śāpa）が、汝には、出来るだろう。』<51>

以上の、屍鬼よりの、物語と問いかけ[の両者]を聞いて、次いで、そのトリヴィクラマセーナ王は、この[問いかけ]に関して、その[屍鬼]に、次のように答えました。<52>

『その両者のうち、その[マダナスダリー]の夫の首（tat-pati-śiras）が、存する（samsthā）ところの、他ならぬその者が（saḥ[^]eṣa）かの女の夫（pati）である。[なぜならば、]首（śiras）は諸々の肢体（aṅga）のうちで主要なもの（pradhāna）であり、再認（pratya bhijñā）は、その[首]に関してある（tad-gata）のである[から]。』<53>

いかがであろうか？ 「二人のうち、どちらがマダナスダリーの夫か？」という屍鬼の問いかけに対してトリヴィクラマセーナ王は、「夫の首のついている方が夫である」と率直に答えている。そして、その答えに続いて「首が諸肢体のうちで主要なものである」「再認がその首に基づいて成立する」と述べているのである。シュローカという制約のせいも、理由を指示する「なぜならば」等の用語は用いられていないのであるが、このシュローカ後半が、シュローカ前半による答えに対する理由を表していると考えるのは自然であろう。筆者もそのように考えたわけだが、筆者の疑問は、その理由が果たして本当に理由になっているのか？ という点にかかっていたのである。

先の筆者の訳に対して、上村勝彦氏の訳を引いてみよう。

（9b）二人のうちで、夫の頭がついている方が彼女の夫である。頭は身体のうちで最も重要なもので、自己の認識は頭に依存するのであるから。⁽⁷⁾（上村[1978]64頁）

この上村訳のように、「頭」が身体を構成している諸肢体のうちで「最も重要なもの」であることを受け入れることが可能ならばまだいいのである。胴体部に存する筈の「心臓」の役割について考究した⁽⁸⁾ことのある筆者にとっては、人間の身体を構成する四つの手足、頭/首、胴体という六肢体のうちで、頭が「最も重要なもの」であるという主張もにわかには受け入れがたいものであった。アトマンの拠処としての心臓を含む胴体も、実際極めて「重要なもの」なのではないか、と思われたからである。この結果、この「すげえられた首」問題は、否応なく頭が大事か？ 胴体が大事か？ という二者択一的なクリティカルな問いかけに発展

してしまった。そして、筆者は、医学文献たる『チャラカ本集』の「頭」と「心臓」とに関する以下の二つの用例を検討せざるを得なくなったのである。

(x) prāṇāḥ prāṇa-bhṛtām yatra śrīṭāḥ sarva-indriyāṇi ca /

yad uttama-aṅgam aṅgānām śiraḥ tad abhidhīyate //12// (Cs I-17-12:p.99)

(10) 氣息を有する者たちの諸氣息 (prāṇa) と一切の諸感官 (indriya) が存し、諸肢体 (aṅga) のうちの最上位の肢体 (uttama-aṅga)、それが首/頭 (śiras) と言われる。

(xi) arthe daśa mahā-mūlāḥ samāsaktā mahā-phalāḥ /

mahac ca[^]arthaś ca paryāyair ucyate budhaiḥ //3//

ṣaḍ-aṅgam aṅgaṇ vijnānam indriyaṇy artha-pañcakam /

ātman ca saḡuṇāś cetaś cintyaṃ ca ḥṛdi saṃśrītam //4// (Cs I-30-3 ~ 4:p.183)

(11) アルタ (artha) には、十の、マハット (mahat) を根基とする [脈管] が、接続しており、大きな果を持つ。マハットやアルタは賢者たちによって、[心臓の] 同義語として、言われている。 <3> 六肢 (ṣaḍ-aṅga) を持つ肢体 (aṅga) 意識 (vijñāna) 諸感官 (indriya) 五対象 (artha-pañcaka) 有属性のアートマン (ātman) 思考器官 (cetaś) 思考対象 (cintya) は、心臓 (ḥṛd) に依拠している (saṃśrīta)。(9) <4>

この (x) に関しては、矢野道雄氏の以下のような訳も検討すべきである。

(10') 氣息をもつ [すべての生物] の氣息が存在する場所であり、かつ、すべての知覚器官が存在し、しかも身体諸部分のなかで最も重要な部分が「頭部」であると言われている。」(矢野 [1988] 116頁下14-16行)

身体各肢体を説明する箇所での二つの記述 (x) と (xi) を比較しても明かな通り、各肢体のうち「最も重要なもの」が「頭」である、という規定の仕方自体も論理的ではないように筆者は考える。(x) のその部分を、頭/首という一肢体の一特徴として、位置的に「最上部の肢体」という規定を与える記述と解する解釈の妥当性を筆者は指摘したのである⁽¹⁰⁾。「頭」は重要なものである、それと同様に「胴体」も重要なものである。手足のない人間は想像し得ても頭や胴体のない人間は想像できないのである。そうした状況下での「夫の首がついている方が夫である」とのトリヴィクラマセーナ王の回答であり、そして、それに対する理由が、今問題にしている頭/首に関する記述であったのである。重要なのは、「頭/首が大事か? 胴体が大事か?」という問題ではなく、理由の後半部に記載され

た、「再認はその首に関してある」という件である、と筆者は考えたのである。したがって「再認（pratyabhijñā）」ということが問題とされることになり、それに関しても幾つかの用例を元に考究を重ねることになった⁽¹¹⁾。そもそもこの「再認」は、インド古来の哲学に於いても認識論上、一つの重要な概念を為すものである。「これは、あのXXである」との認識が、いわば「再認」である。今の場合に当てはめると、二人の人物を見て、「これは、わたしの夫である」「これは、わたしの兄である」との判断が、再認というものの内実である。人は何を拠り所として「再認」を為すか、という、首/頭によってである、とトリヴィクラマセーナ王は言わんとしているのである。だからこそ、「夫の首のついている方が夫である」との主張の根拠となり得るのである。不本意ながら筆者は、そのような解決に甘んじて先の論攷を結んだのであった。屍鬼による「二人のうちのどちらがマダナスンダリーの夫であるか？」という問いかけを、屍鬼によって語られた「すげかえられた首」の物語の末尾に置かれたマダナスンダリーの「どうするべきだろうか？」との動揺に無理矢理重ね合わせた上で、トリヴィクラマセーナ王の屍鬼の問いかけに対する回答ではなしに、窮地に立たせられたマダナスンダリーに対して与えられた現実的な助言、対処法と見なすことに甘んじたのである。つまり、そのように解釈すると、トリヴィクラマセーナ王の回答が、これまで馴染みのなかった新しい身体を持ち主である二人のいずれを自らの夫として遇すればよいのか？という人生相談に対する気の利いた現実的なアドバイスに終わるように思えて筆者は釈然としなかったのである。人間の身体を構成する六肢体のうち頭が最も重要なものであるというテーゼにも納得行かず、取り敢えず「夫の首のついている方を夫として考えるべきだ」とするご都合主義的な理屈にも満足出来なかった。

インド哲学の見地よりすれば、何よりもアートマンこそが重要である、アートマンの拠りたる心臓こそ重要であると言ふべきなのではないか？ 屍鬼のトリヴィクラマセーナ王の問いかけは、マダナスンダリーの現実的な対処法を訊くものではない。二人のうちどちらがマダナスンダリーの夫であるか、と問うものである。その「すげかえられた首」問題の再考が、本稿の狙いなのである。これまでの「すげかえられた首」問題の考察には、「死と蘇生」「死と再生」の視点が決定的に欠落していたと考えられる。「サーヴィトリ物語」を想起すべきである。また、「ルルの蘇生した妻プラマドヴァラー」のエピソードを想起すべきである。そ

して、天界へと再生したダシャラタ王によって射殺されたあの若き苦行者を想起すべきである。屍鬼による物語の最後に描かれたマダナスンダリーの動揺は、「どちらが自分の夫なのか」ということに対するものではあるまい。自分の不注意によって「夫に兄の胴体を与えてしまった」ことに対する動揺である。われわれは有名な「ナラ王物語」の婿選びの儀式でのダマヤンティー姫の戸惑いを知っている。マダナスンダリーは、姿形を含めてあらゆる細部までもが全く同じ五人のナラ王を前にして真実のナラ王を選び出すことの困難に悲鳴を上げたダマヤンティーとはわけが違っているのである。二人の男が蘇生した後、三人で話し合いがもたれたとの記述もあるのである。マダナスンダリーには、どちらが夫であるか、兄が誰であるか、も直ちに諒解されたことであろう。これはマダナスンダリーだけではない、夫にしても兄にしても自分が誰であるかは自明の筈である。これら三人を前にしてあたふたと戸惑っているかのようなのは、われわれ読者なのである。その疑問の声を代行してくれたのが、物語をきかせてくれた屍鬼であり、その疑問を解いてくれたのが、トリヴィクラマセーナ王であった。

『その両者のうち、その[マダナスンダリー]の夫の首(tat-pati-śiras)が、存する(samsthā)ところの、他ならぬその者が(saḥ^eṣa)かの女の夫(pati)である。[なぜならば、]首(śiras)は諸々の肢体(aṅga)のうちで主要なもの(pradhāna)であり、再認(pratyabhijñā)は、その[首]に関してある(tad-gata)のである[から]。』

「死と蘇生」と「死と再生」のメカニズムを見てきたわれわれには、もはや解説は不要かも知れない。だが、以下には、煩をいとわず今しばらく論を続けてみたい。

確認しておくべきことは、蘇生した二人のうちどちらが夫か？という問いかけで訊かれているのは、二つの人間の身体のうちどちらが夫の身体であるか？ということではないという単純な事実である。「すげかえられた首」からなる二つの人間の身体を前にして、どちらももはや「夫の身体ではない」、もはやどこにも「夫の身体はない」と言うべきであろう。＜夫の首と兄の胴体の合成身＞と＜兄の首と夫の胴体の合成身＞という言い方が可能ではある。その問いかけで訊かれているのは、サトヤヴァットの身体から縄に縛って引き出された、夫サトヤヴァットたる「プルシャ」に相当するものが、その二つの身体のうちどちらに帰還したか？というものである。二つのプルシャ（人物）AとBが、身体 a a と身体 b b

の装いの下で生活していた。Aはマダナスダリーの夫であり、Bがマダナスダリーの兄である。ところがその二人は自らの手で斬首して死んでしまう。「死」とは、AとBの粗大な身体 a a と b b よりの離脱である。先に用いた比喻を使うならば、A、Bという運転手が、乗物 a a、b b から降りたということである。運転手の乗物からの離脱は、即、燃料の蕩尽を意味する。しかも今の場合、乗物そのものも a / a、b / b という具合に二つに切断されて破壊された。運転手AとBは次の乗物に向けてダルマの王等の指令に従って黄泉の国へ連行される。ところが、二つに切断された乗物を修復したならば、運転手を元に戻してやろうというガウリー女神が出現する。マダナスダリーは渡りに船とばかりに、a / a、b / b 状態の二台の乗物を修復したと考えたのだが、不注意から a b、b a という二台の斬新な乗物を仕立ててしまう。ガウリー女神はAを a a へ、Bを b b に戻してやろうと考えていた筈である。あるいは、蘇生もガウリー女神の指示によってヤマ神などが代行するのであろうか？ それとも燃料に相当するものをA、Bに付与すれば、運転手A、Bは自発的に自らの乗物に戻っていけるのであるか？ そのメカニズムの仔細に関しては前節などでも明白にならなかった。乗物はいずれも似たり寄ったりであろう。運転手不在の燃料を充填した乗物が一台しかなかったのであるならば、支障は生じない筈であるが、二人の運転手AとBが、二台の乗物を前にしての「蘇生」劇である。乗物など似たり寄ったりとはいえ、ヘッド（頭／首）を見たら誰の乗物かがわかる、「これはAの乗物である」「これはBの乗物である」、こうした何者かによる再認がなされた結果⁽¹²⁾、運転手AもBも乗物に乗り込んで「蘇生」するのである。時間のかかる新たな人間の身体＝乗物が創造されてのことではないにしても、「蘇生」というよりはむしろ「再生」と言うべきかも知れない。いや、「蘇生」と「再生」は異なる、新たな人間の誕生には母親の存在とそれ相応の時間が不可欠であろうから、やはり「蘇生」と言うべきである。AもBも乗物に乗り込んだら所定の運転席に着く筈である。運転席は、人間の場合どこにあるかと言うと、古代インド人にとっては「心臓」ということになる。ヘッドによって乗物が識別されたのであるから、運転手Aは乗物 a b に、運転手Bは乗物 b a に乗り込んでいる筈である。運転席の座り心地は前に馴染んだものとは若干違う、違和感を覚える筈である、運転手Bも同様。だが、その違和感もすぐに解消されていくであろう。いずれにしても、運転手Aと乗物 a b のヘッド／顔 a が合致している点は、現実的なやりくりの上からも幸いであ

ったと言えるのである⁽¹³⁾。

以上である。このように考えて初めてトリヴィクラマセーナ王の回答とその理由を理解できると思われるのである。いかがであろうか？ 人間の身体を構成する六肢体のうち、どれが最も重要か？ といった議論に与する必要はなかったのである。身体各肢は、いずれも固有の重要な役割を担っている。それらのうちのどの一つを欠いても円滑な活動は適わないと諒解すべきであった。人間としての行為の為には、身体は不可欠である。善業も悪業もその身体を通してでしか実現出来ないのである。だが、インド的文脈にあっては、所詮身体は身体であるということも可能なのである。愛する夫サトヤヴァットが捕縛されてヤマ神に連行されて行く時、貞女サーヴィトリーがその後を追いつがったことがしみじみと想起されるのである。

この「すげかえられた首」のモチーフは、今日まで様々なヴァリエーションをもって伝えられている。物語の設定も、また屍鬼の問いかけも、王の回答も、一通りではなく、「すげかえられた首」問題も解釈が多様で、一筋縄では行かないのであるが、少なくともソーマデーヴァ作『カタールリットサーガラ』所収の「屍鬼二十五話」中の第六話に関する限り、本稿で筆者が提出した視点は十分に有効なものであると思われる⁽¹⁴⁾。

むすび～死と変容に向けて

さて、以上で本稿で意図した作業はほぼ終えた。インド的文脈にあっては、「死」は一つの重要な事件ではあるが、決して決定的な終焉を意味するものではなかった。「死体」が残存する限り「蘇生」は可能である。地上的身体はこれ無しから自在に紡ぎ出すことは出来ない、それが鉄則であるように思える。その意味で、筆者は「死」を「変身」ないし「変容」とむしろ結びつけて考えるべきであろうと愚考するのである。その時「死」を司る「生命」を差配する者の行使する「能力」は、苦行などによって培われる「超能力」と、決定的に異なるものではないと考えられるのである。「呪詛／恩寵」と「運命」の行使者によって一喜一憂する生類であるが、それは神々にとっても無縁のものではない、ということにも思いをいたすべきであろう。筆者は本稿を、「靈魂に顔はあるか？ puruṣaについての覚書き」⁽¹⁵⁾の想を膨らませる中で、また次に発表することになるだろう拙稿「カーマの死」⁽¹⁶⁾の為の序論として書いたのである。

略号・テキスト・参考文献

Akbh:Abhidharmakośabhāṣya(PradhanEd.)

Bkm:Bṛhatkathāmañjarī(NirṇayaSEd.)

Cs:Carakasamhitā(NirṇayaSEd.:KSS 228,1984r)

DvK:Die vertauschten Köpfe von Thomas Manu(*Späte Erzählungen* in G.W./S.Fischer,1981r)

Kss:Kathāsaritsāgara(NirṇayaSEd.)

Mbh:Mahābhārata(PoonaCrEd.:TextOnly)5vols.

R:Rāmāyaṇa(NirṇayaSEd.)2vols.

VSk:Vācaspati ś Tattvakaumudī ad Sāṃkhyakārikā(GJhaEd.)

岩本裕

[1980-85]: 訳『ラーマヤナ』1 & 2 (平凡社)

春日井真英

[2001]: 「首をすげかえた女の話 『屍鬼二十五話』とマンの『すげかえられた首』をめぐって」『東海仏教』第46輯

金沢篤

[1991]: 「シャンカラとhr̥daya」『前田専学博士還暦記念論集<我>の思想』(春秋社)

[1996]: 「śirovinimaya: 「頭/首」に関する覚書き」『駒澤大学佛教学部論集』第27号

[2005]: 「ダマヤンティーの美(1) rūpaとvapusを中心に」『駒澤大学佛教学部研究紀要』第63号

上村勝彦

[1978]: 訳『屍鬼二十五話』(平凡社)

[2002-05]: 訳『マハーバーラタ』1~8 (筑摩書房)

矢野道雄

[1988]: 編訳『インド医学概論』(朝日出版社)

山西英一

[1951]: 訳『シータの死』(熊書房)

註記

- (1) 高橋義孝訳 新潮文庫 83-84頁。なお、諸般の厳しい制約から、註記は最小限に留めた。諒とされたい。
- (2) 金沢 [1996] を参照。
- (3) 「サーヴィトリ物語」の概容は、上村 [2002-05] iv 344-379頁等を参照されたし。
- (4) このエピソードの概容は、岩本 [1980-85] ii 228-239頁を参照されたし。
- (5) 特に岩本 [1980-85] ii 237頁下段参照。
- (6) 以下の用例で明かな通り、「神としての再生」は、四生のうちの化生に相当する。

catasro yonayas tatra sattvānām aṇḍajā-ādayaḥ //8//

aṇḍajā yonir jarāyujā saṃsvedajā upapāḍukā yoniḥ / yonir nāma jātiḥ /

<略>.....upapādukā yoniḥ katamā / ye sattvā avikalā ahīna-indriyāḥ sarva-aṅga-pratyāṅga-upetāḥ sakṛd upajāyante / <略>..... / tad yathā deva-nāraka-antarābhavika-ādayaḥ / (Akḥ -8:pp.118-119)

そこにおいて、卵生[種](aṇḍajā)などが、有情(sattva)たちの4つの種(yoni)である。

[すなわち]卵生=種、胎生=種、湿生=種、化生=種(upapādukā~yoni)、種(yoni)とは、生まれ(jāti)のことである。・・・<略>・・・化生=種とはいかなるものか？ ある有情たちは、不備なく、感官無欠で、一切の肢体(aṅga)と副肢体(upāṅga)を具足して、一時に、生じる、[それが、化生=種である。]・・・<略>・・・たとえば、神(deva)、地獄の住者(nāraka)中有(antarābhavika)などである。

- (7) pratyabhijñā 上村勝彦氏の訳語「自己の認識」に関してもかつて疑義を呈した筆者だが、身体より離脱したブルシャ魂が、元の身体に帰還するに当たっての「自己の身体の認識」あるいは人が鏡を見て、「これが自分である」という認識を持つ、そうした点を顧慮しての訳語だとすれば、会通しないこともないかも知れない。
- (8) 金沢 [1991] 参照。
- (9) 矢野 [1988] 230頁上段参照。
- (10) uttama-aṅgaを「最も重要な部分」としているが、これは「最上位の肢体」とすべきであろう。チャクラパーニダグタの註よりしても、「最も重要な」(pradhāna)の意味を担うのは、uttamaではなく、prāṇa(氣息の所在位)の方である。uttamaは、upariṣṭhātという副詞で註釈されている。「uttama-aṅgaというの是最上位のaṅgaである」(upariṣṭād aṅgam uttama-aṅgam)、prāṇaとは、「呼吸」のことであり、「鼻と口を経由して出入する生命維持に不可欠の氣息」である。金沢 [1996] 288-287頁参照。
- (11) 「再認」に関しては、金沢 [1996] 285頁などで論じている。顔の持つ役割に関しては、金沢 [2005] 253-249頁などで論じている。
- (12) 蘇生のメカニズムが必ずしも明確ではないが、トリヴィクラマセーナ王の回答にある理由が有意味であるとするならば、「蘇生」に先だって、何者かによる粗大な身体に対する「再認」のプロセスが不可欠であると思われる。ガウリー女神が、伝統的に死を直接的に司る神たるヤマ神(またはその配下)が、粗大な身体に帰還することになる魂(微細な身体)かであろう。
- (13) 次註にも見る通り、トーマス・マンの小説「すげかえられた首」は、「これで見ても、首は、あるひとがその当人であるか否かを知る上に、極めて重要な素をなすといふ議論が、立派に成立つことがわからう。譬へば、君の息子が兄弟、または同じ市のひとが、よく見慣れたいつもの首を肩にのつけて、部屋の中へ入ってきたと想像して見給へ。よしんば首以外の彼の容子がどうかしてあたとしても、君は、これが君のその兄弟であり、あるひは息子であり、乃至は同じ市の人であるといふことに、いささかでも疑惑を抱くだらうか？」(山西 [1946] 130-131頁)等の興味深い省察に充ち満ちている。先頃その存在を知った春日井 [2001] は表題からして期待をもって読んだが、ほとんどが翻訳に基づく誤記の多い外面的な紹介に終始して、不満が残る。比較はともかくとして、トーマ

ス・マンの「すげえられた首」については稿を改めて論じてみたい。比較文学的なアプローチに関しては、上村 [1978] 66-67頁のコンパクトではあるが充実した知見を出発点としたい。

- (14) いずれにしても、「夫が、夫の首をつけている」「兄が、兄の首をつけている」ことはマダナスダグリーにとってのみならず、夫自身にとっても兄自身にとっても幸いなことである。「すげえられた首」のモチーフをインドの説話に取材し、みごとな現代小説に仕立てたのがノーベル賞作家のトーマス・マンである。そこには以下のような印象的なフレーズが見られる。

Gemahl ist, der da trägt des Gatten Haupt.

Kein Zweifel ist an diesem Spruch erlaubt.

Denn wie das Weib der Wonnen höchste ist und Born der Lieder,

So ist das Haupt das höchste aller Glieder. (DvK,,p.313)

それ、夫は夫の頭をつけし者なり。

ゆめ疑ふことあるべからず。

こよなき幸と謳はるるおみなのごとく。

頭こそ四肢五体の至高の王冠。（山西 [1946] 123-124頁）

ここからも想像し得る通り、トーマス・マンも、この「すげえられた首」問題に対して筆者が提出した新たな視点は、一切顧慮していないのである。「人間の精神的作用の中枢」を心臓に置くという、いわばインド文化にとっての伝統的視点は欠落しているようである。精神作用の中枢は「頭脳」であり、その頭と対比される「肉体」としての「胴体/身体」が置かれているのである。この「すげえられた首」問題に対してこれまでわれわれが犯した誤解も、そのことと関連していると考えられる。この「すげえられた首」のモチーフは、インドに限定しただけでも種々伝えられているが、その一つの伝承と言うべき『プリハットカターマンジャリー』には、以下のようにあった。金沢 [1996] 285-284頁参照。

śrutvā^iti rājā provāca yasyā bhartṛ-mukhaḥ patih /

śiraḥ sarva-indriya-ādhāraṃ sakalaṃ hi kalevaram //417// (Bkm,p.321,ll.11-12)

・・・と聞いて、王は、[次のように] 答えました。彼女の、夫の顔 (bhartṛ-mukha) を持つ [者] が、夫 (pati) である。なぜならば (hi) 頭 (śiras) は、一切の感官を持つ、欠けたところなき (sakala) 肢体 (kalevara) であるから。

- (15) 2005年9月4日、駒澤大学で開催された日本仏教学会2005年度学术大会で筆者によってなされた研究発表。資料的には本稿と重複する部分が多い。
- (16) 『駒澤大学佛教学部論集』第37号 (2006.10) に掲載予定。